高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.22

●「曼珠沙華（本山町）」（写真提供／横田鉄喜）

リレー随筆㉒　放浪記に恋した父

山田まさ子

林芙美子が関東大震災後の東京で、詩人のたまり場に出入りしてダダの洗礼を受けていたころ、わたしの父は早大夜間部の学生であった。給仕をしながら勉学していたというのだが、はたして本当だろうか。なにしろ、大嘘つきの親父殿のいうことだから、そのままには信用できない。ただ当時、商科学校に通っていたのに、親父殿の文学熱に煽られて、退学したという人の証言があるから、モグリの聴講生くらいにはなっていたのに違いない。

「きみ、メシのために働くなんて、やめちまえ。この数字の羅列のどこに、生きる意味がある？」

親父は、まじめな友人の算用の参考書を古本屋にたたきうって、酒代にかえた。食事といえばソーライス、飯にソースをかけたのを、洒落のめしてそう呼んでいた。

林芙美子は、そういう不良文学学生にとって、希望の〝花〟であった。まだ「放浪記」が世に出る前、父は坂道で本を売っている彼女をみたという。同人誌仲間が、「あの女が、林芙美子ってひとだよ」と教えてくれた。ネルの着物姿の冴えない女性。だが、作品には、青春の熱と、なつかしい旅の香りがあった。

旅、父は行商人の子として生まれた。明治四十三年、栄養失調で死んだふたりの兄のあとであった。

わたしの祖父はもともと旅役者だったが、土佐に巡業にきたおり、小屋に毎日通う小娘にほれた。「役者ふぜいに嫁にはやれぬ」といわれて、役者をやめて、カケオチした。

父の記憶では、「ちんまい背のおかやん」だった。パンや饅頭やお椀などくるんだふろしき包みを背負って、売り歩く。

ちょこちょこ歩きながら、父は「おかやん、パン、みい」といっていたそうである。

「パン、三つも食べたら、おなかこわすぞね」

それでも、ちぎったアンパンの切れ端を、口に入れてくれた。よだれを指でそのまま、ぬぐう。頭についたシラミをとってもくれた。母は父が三歳のとき子宮癌で亡くなった。

「放浪記」が出たとき、父はむさぼり読んだ。林芙美子のファンクラブにも入った。銀座の例会に出席した芙美子を、声もかけられずに眺めた。

わたしが四つのころ、四万十川べりで散歩しながら、父は、オイチニイの薬売りの話をしてくれた。尊敬となつかしさを込めて、ハヤシフミコという名前がきかされた。

昭和の初め、東京に五万人いるといわれた文士希望の父はひとつぶである。林芙美子は頂点にいた。「放浪記」は熱病のように恋された書であり、親兄弟のない文学青年の青春も、人生も繰り返し支えてくれた。

（作家・東京在住）

高知県立文学館

◆次回企画展紹介◆

「永遠のグリム童話展」

2003年11月15日(土)～12月21日(日)

世界中の子どもたちに愛され読み続けられる「グリム童話」。ドイツのグリム兄弟が集めた二百話にも及ぶメルヘンで、正式には『子どもと家庭のメルヘン集』という名前で出版された本です。

「白雪姫」「赤ずきん」「ヘンゼルとグレーテル」「いばら姫」「狼と七匹の子やぎ」「ラプンツェル」「かえるの王様」など、どれも私たちが幼い頃に出会い、その世界に旅したことのあるものばかりです。

恐ろしい魔女や勇敢な子ども、美しいお姫様や意地悪な継母、かしこい人やなまけ者…。さまざまな人や動物が繰り広げる物語は、今も昔も子どもたちを物語の世界に誘い、夢中にさせます。グリム童話は、世界百二十カ国で翻訳され、聖書についで多く読まれている本と言われています。この展覧会では、子どもたちを魅了し続けるグリム童話の世界をご紹介します。

■グリム兄弟と「グリム童話」の歴史

このグリム童話を産んだ、童話の恩人ともいうべきグリム兄弟は、ドイツのハーナウで、兄ヤーコプは一七八五年一月四日、弟ヴィルヘルムは一七八六年二月二十四日に生まれました。

グリム兄弟

兄弟は、カッセルの高等中学からマールブルグ大学に入学し、ここで若き歴史法学者やロマン派作家に出会い、中世のドイツ風俗、伝承文学などに興味を持ちました。

一八〇七年頃から、兄弟は、古い民話の収集にとりかかります。兄ヤーコプ二十二歳、弟ヴィルヘルム二十一歳のころです。

最初はそうではありませんでしたが、やがて、収集の際、兄弟は意識的に、日付、場所、語り手の名前をメモするようになります。学問の研究において、わずかなものでも捨てないという兄弟の姿勢が、名もない民衆が語ったメルヒェンに資料的な価値を与えたのです。当時はそれらの情報を保存する価値があるとは思われていませんでしたが、グリム兄弟はすでにその価値を理解していました。グリム兄弟の仕事は、後世の子どもたちに、魅力的なおはなしをたくさん残したという功績だけでなく、のちの民俗学研究にも貴重な資料を残したのです。

そして、兄弟は、一八一二年のクリスマス直前に『子どもと家庭のメルヒェン集』第一巻（八十六話）を、一八一五年には、第二巻（七十話）を発表します。

その後、第一巻と第二巻をまとめて通し番号にし、さらに何度も改訂を重ねます。現在もっとも多く読まれているのが、最終版である第七版（二百話）です。

■グリム童話の語り手

それ以前には、口承文芸の収集に取り組んだ人はほとんどおらず、兄弟は何のお手本も持たずに取り組まなくてはなりませんでした。

兄弟は、ドイツの庶民の間に伝わるメルヘンを集めたかったのですが、語り手をさがすのには大変苦労しました。いろんな人をあたり、初期の段階では、上流階級の家の若い女性からはなしを聞いています。「いばら姫」や「白雪姫」などの話は、若い娘らしい好みがあらわれています。

初版第一巻を出した翌年、一八一三年に、兄弟はカッセルの町に野菜を売りに来ていた、ドロテーア・フィーマンという五〇歳すぎの女性に出会います。彼女は、グリムが理想とする素晴らしいメルヘンの語り手で、第二版には、彼女の顔を口絵として入れているほどです。彼女は、同じ話を一字一句違わずに何度も語ることができたといいます。グリムは、彼女をきっすいのドイツ人の農民と信じていたので、ドイツ庶民の間に根付いた話を語ってくれると感動しました。彼女の話は、上流階級の女性が語った話とは対照的に、主人公が苦労してしあわせをつかむ傾向があります。

ほかにも何人かの語り手がいますが、グリム兄弟は、聞いた話をふるいにかけ、また語り口を少しずつ変えたりしな

ドロテーア・フィーマン

がら、最終版に近づけていきました。

ところで、グリム童話は長い間、古いドイツ民族の間に伝わるメルヘンと思われていました。しかし、近年の研究では、聞き書きではなく、書物からとられた話が多くあることや、さきの上流階級の娘や、フィーマンさんが、実はフランス系の家系であることがわかってきました。しかし、グリム童話の魅力は、民族とは関係なく、もっと深いところにあると言えるでしょう。時代も民族もこえて愛されていることからも、グリム童話の普遍的な力を知ることができます。

■描かれたグリム童話

一八一二年、一八一五年に出された初版は、挿絵がまったくありませんでした。しかし、第二版では、ヤーコプとヴィルヘルムの一番下の弟（ヤーコプとヴィルヘルムだけをさしてグリム兄弟と呼ぶが、グリム家は生後まもなく死亡した三人の男の子をのぞいて、五人の兄弟と一人の妹がいた）、ルートヴィヒ・エミール・グリム（一七九〇～一八六三）によって二枚の絵が描かれました。一点は、「兄と妹」の挿絵、もう一点は、メルヘンの重要な語り手であったドロテーア・フィーマンの肖像です。

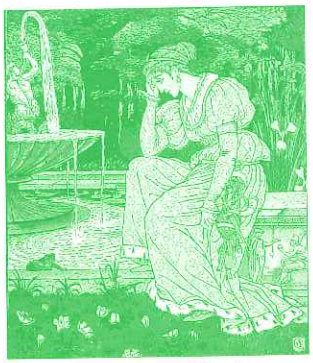
「兄と妹」の挿絵

グリム童話に本格的に挿絵が入れられるようになったきっかけは、一八二三年にロンドンで出された英語版の『ドイツの良く知られたお話』です。英語版は、すでに有名な風刺画家であったジョージ・クルックシャンク（一七九二～一八七八）による挿絵が入れられました。ユーモアたっぷりに描かれたクルックシャンクの挿絵によって、この本はドイツ国内以上に人気を博します。

ジョージ・クルックシャンクによる挿絵

これにならってグリム兄弟も、弟ルートヴィヒの手による挿絵が七枚入った、五十話のメルヘン選集（通称「小さい版」）を一八二五年に刊行しました。これにより、ドイツ国内でもグリム兄弟のメルヘンは普及していきます。

グリム兄弟のメルヘンはやがてさまざまな画家により描かれます。とくに、イギリスのウォルター・クレイン（一八四五～一九一五）のメルヘン本は、後のメルヘン挿絵の新たなスタンダードとなりました。ほかに、ハインリヒ・レフラー（一八六三～一九一九）、ヨーゼフ・ウアバーン（一八七二～一九三三）、オットー・ウッベローデ（一八七二～一九二二）、ハインリヒ・フォーゲラー（一八七二～一九四二）のようなユーゲンシュティールの画家たちや、アーサー・ラッカム（一八六七～一九三九）などがメルヘン挿絵画家として名をなしました。


ウォルター・クレイン
「蛙の王様」

ハインリヒ・レフラー
「白雪姫」

この展覧会は、ドイツのカッセルにあるグリム兄弟博物館が、グリム兄弟に関するオリジナル資料を、はじめてドイツ国外で公開するものです。

兄弟の自筆資料と、弟が描いたグリム童話の絵などにより、グリム兄弟が歩いた生涯をたどります。また、十九世紀からさまざまな画家の手によって描かれたグリム童話の挿絵を展示し、グリム童話の魅力をご紹介します。

時代や国を超えて愛され続けるグリム童話は、人間が生きるための知恵や、やさしさなどがいきいきと語られています。その奥深い魅力にふれることにより、現代を生きぬく私たちにも忘れていたものを思い出させてくれます。（野中佐知子）

関連行事

いずれも入場無料、文学館にて

✪11月15日（土）14時～16時　「朗読の会～グリム童話を読む～」

✪11月28日（金）13時30分～15時　記念講演会「グリム童話の世界」
講師／小澤俊夫氏（ドイツ文学者）

＜申込み＞ハガキ（またはＦＡＸ）に住所、氏名、電話番号を記入のうえ文学館「グリム童話展講演係」まで。館受付でも申込み可。
定員先着150名

✪11月30日（日）13時30分～15時30分
ミニコンサート「星の銀貨」とドイツの子どもの歌
音楽／武中淳彦氏（作曲家）、アルフレッド・ゲアマン氏

✪期間中毎週日曜日（11／30のぞく）15時～15時30分　よみきかせ　グリム童話

学芸員メモ

林芙美子の周辺から

昭和15年10月高知桟橋に着いた林芙美子、横光利一、高見順、浜本浩（左から）
（新宿歴史博物館提供）

一、「さよならだけが人生だ」は、実は林芙美子のことばから

井伏鱒二訳による漢詩「勧酒」の一節としてあまりに名高い「さよならだけが人生だ」は、林芙美子の言葉からヒントを得たという。出典を探していたとき福山文学館の小川由美学芸員からご教示あり。以下、井伏の文章から。

「（前略）私は学生時代にこの島（因島）の三ノ庄といふ港町に暫く滞在した。

（中略）

その後、十年ちかくたって、私は林芙美子さんにすすめられて尾道へ行き、やはり林さんにすすめられて一緒に三ノ庄に行った。

（中略）

やがて島に左様ならして帰るとき、林さんを見送る人や私を見送る人が十人たらず岸壁に来て、その人たちは船が出発の汽笛を鳴らすと「左様なら左様なら」と手を振った。林さんも頻りに手を振ってゐたが、いきなり船室に駆けこんで、「人生は左様ならだけね」と云ふと同時に泣き賦した。そのせりふと云ひ挙動と云ひ、見てゐて照れくさくなって来た。何とも嫌だと思った。しかし後になって私は于武陵の「勧酒」といふ漢詩を訳す際、「人生足別離」を「サヨナラダケガ人生ダ」と和訳した。無論、林さんのせりふを意識してゐたわけである。」

（井伏鱒二「因島半歳記」より）

芙美子の初恋の人岡野軍一は因島の出身であった。尾道と井伏の郷里（現・福山市）は隣接し、昭和五年四月には揃って尾道で文芸講演もした二人だから一緒に因島を訪ねる機会もあったのだろう。

「さよならだけが人生だ」が林芙美子に由来すること、その背後に失恋に終わった芙美子の涙があったことを改めて噛みしめたい。

二、歌人北見志保子も「牡蠣」出版記念会に出席

昭和十年十一月、芙美子自ら知人を呼んで開催した『牡蠣』出版記念会。その芳名録には佐藤春夫・川端康成・徳田秋声といった著名人に混じって濱本浩・山川朱実の署名がある。当時、大衆文学作家の花形でもあった濱本浩は頷ける。だが山川朱実―北見志保子の記名には驚かれた方もあるのでは。

歌人北見志保子は昭和初期、徳田秋声に師事し小説も習作。芙美子が本郷森川町の秋声宅をしばしば訪れ、秋声から励まされ、また金銭的な援助も受けたことは、「放浪記」その他に出てくる。「山川朱実」署名から、この芙美子と志保子という一見異質な二人の女性が、知友で、互いに言葉を交わしたこともあっただろうことを教えてくれ、興味深い。

昭和16年初夏、徳島県池田町白地の吉野川で。
小西悦助翁と林芙美子（新宿歴史博物館提供）

三、大原富枝は一面識もない林芙美子から突然書簡をもらったか

大原富枝に「林芙美子さんをめぐる思い」という短い文章がある。

「昭和二十二年の三月、突然、私は林芙美子の署名のある手紙を貰った。林さんというひとはなかなか手紙を書かない人だった。とあとで知ったが、一面識もない大先輩であったから私もおどろいたし、感激もした。（中略）見舞いの言葉とともに、単行本を出す便宜をはかってあげたいから、原稿をそろえてよこしなさい、という親切な文面なのであった。（後略）」

文中の二十二年三月林書簡は、大原富枝文学館のご協力を得て今回の林芙美子展でも紹介しているのでご存知の方も多いだろう。芙美子の優しさが滲む良い書簡である。

ところで、一面識もない後輩作家に、超売れっ子作家林芙美子の方から、突然に手紙を出す―それはあり得ただろうか。

次に紹介するのは、林福江氏・今川英子氏のご協力で、今回初公開した大原書簡である。

（宛先）淀橋区下落合四丁目二〇九六
林芙美子様

（差出元）目黒区清水町三三八
伊藤義末方　大原富枝
（消印）年不詳七月十八日

「このあいだは、突然お伺いして、長いことお邪魔いたしました。お忙しいところを大変失礼申し上げたと思ひます。

子供のころ―と申してはおかしいですけど、でもそんな印象ですーから、お名前ばかりを遠い高い人と思って眺めて来た人とお目にかゝれて、生きてゆくことって楽しいものだなと思ひました。

初対面でございましたし、友人と一緒で、とりとめもなくたゞざわくと長時間お邪魔してしまひましてしまひましてほんたうに失礼申し上げました。おかげさまで帰ってまゐりますと、書かばやくと勇猛心が湧いてまゐりました。（後略）」

消印は判然としないのであるが、年譜をたどれば、大原富枝が目黒区清水町の伊藤方に移ったのが二十年十月、伊藤方から東久留米村への転居が二十二年四月だから、この書簡は二十一年七月のものと推測して妥当か。大原富枝筆「林芙美子さんをめぐる思い」との齟齬はあるが、林・大原初対面は二十一年七月大原富枝の林邸訪問によってなされ、芙美子宛て大原書簡の方が、二十二年三月の大原宛て林書簡よりも早かったと考えたい。

四、「花のいのちはみじかくて苦しきことのみ多かりき」―名句の由来は

乞われると芙美子がよく書いたといわれるこの有名なことばが、どのようにして芙美子のうちに生まれたか、―もと歌あり、の説もあるが―そのヒントをも大原富枝の文章は教えてくれた。「林芙美子さんをめぐる思い」の後半、文章は次のように続く。

「石だんをあがってゆくと、林さんが、いのちみじかし、恋せよおとめ、あかきくちびるあせぬまに、と歌っているのがきこえたこともある。こえの美しいひとで興が乗るとほんとうに愉しそうに歌った。」

吉井勇作詞の「ゴンドラの歌」は大正四年に芸術座で演じられた「その前夜」の劇中歌として歌われ大ヒット。芙美子もまた、その娘時代から愛唱し、終戦後もその美しい声で愛唱し続けていたことを物語る。

「花のいのちはみじかくて…」この言葉の源泉のひとつとして吉井勇の詩「いのちみじかし恋せよ乙女…」がたしかに存在したであろう。

（別役佳代）

閲覧室から

『もう一つの出会い』

宮尾登美子　著
（海竜社）

十七歳で結婚しやがて破局の時を迎えた作者が、失意の底から新たに作家として歩み出したのは三十八歳の時。ゼロからの出発だった。

愛、結婚、夫と妻、母と子、作家であること、孤独、故郷、なつかしい風景、土の匂い…。自らの軌跡をふりかえりながら、様々な出会いと感懐が独特の細やかな筆致で綴られていく。

現在週刊朝日に「宮尾本　平家物語」を掲載中の人気作家が、独自の筆致で綴った珠玉のエッセイ三十九篇が収録されている。

昭和五十七年二月初版以来、読者に愛され、読み継がれ、長い間姿を消すこともなく、書店に並び続けた随筆集「もう一つの出会い」。この二十年の間には、読者は入れ替わり、時には、親子三代にもわたって愛読された作品の数々が、愛蔵版として、装いも新たに登場した。

随筆には、小説とは違い、直接素顔の作者にふれるという楽しみがある。作者にとって生きるということ、愛するということはどう云うことか。作者の素顔を垣間見ることが出来るだろう。

県内同人誌紹介

季刊『生徒』

「生徒」の中心的同人伊藤大さんは、定年前後から体調を崩して、入退院を繰り返していた。親友片岡幹雄が亡くなったことも、精神的な原因の一つのように私には思われた。

伊藤さんの発意で、片岡の追悼集「きさらぎタンポポ」を作った。彼が一手に編集その他の雑用を引き受けて、立派な追悼集が出来た。その時の活き活きした伊藤さんを思い出し、私は雑誌を作ることを提案したのだった。

一九九四年片岡は亡くなったが、その以前伊藤さんと片岡は、何時の日か二人で「弟子」か「生徒」という雑誌を出そうと決めていたのだという。

季刊「生徒」は一九九四年五月創刊。同人は伊藤さんと片岡に関わる周囲の人達のささやかな雑誌。（代表　片岡千歳）

発行所　〒七八〇―〇八三三
高知市南はりまや町二―五―一
タンポポ書店

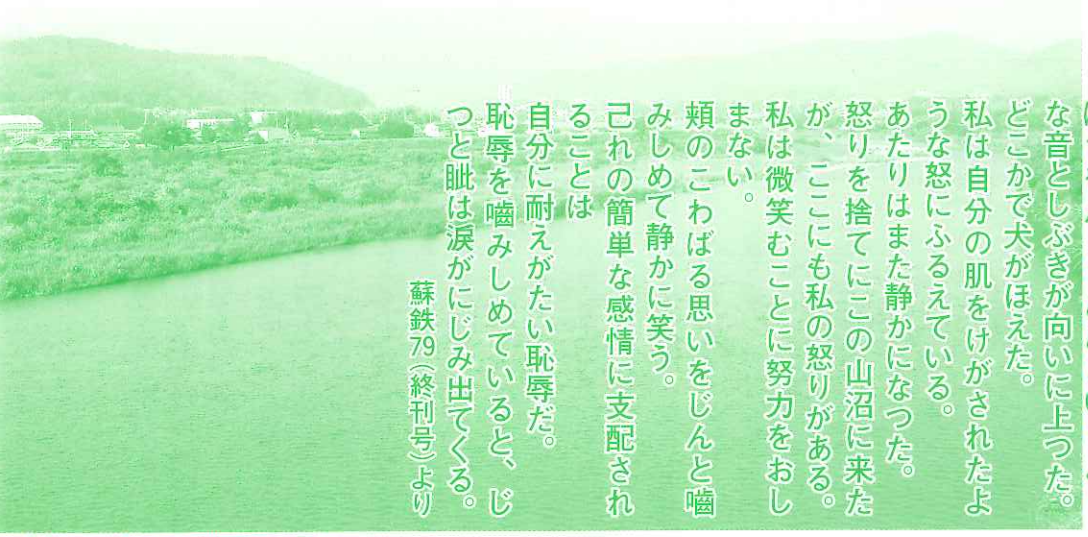
土佐文学さんぽ 20

島崎曙海（あけみ）

忿怒に就いて

山沼には山鴫がおりてきた。
私の水浴（みづあみ）している空を散弾が
とんだ。
ぽちやん、ざああというような音としぶきが向いに上つた。
どこかで犬がほえた。
私は自分の肌をけがされたような怒にふるえている。
あたりはまた静かになつた。
怒りを捨てにこの山沼に来たが、ここにも私の怒りがある。
私は微笑むことに努力をおしまない。
頬のこわばる思いをじんと噛みしめて静かに笑う。
己れの簡単な感情に支配されることは
自分に耐えがたい恥辱だ。
恥辱を噛みしめていると、じつと眦は涙がにじみ出てくる。

蘇鉄79（終刊号）より



物部川から土佐山田町方面を望む

昭和二十二年夏、高知に詩誌の創刊が相次いだ。「南方浪漫派」「朝戸」「蝶」「らんぷ」「心衆」「渦」「蘇鉄」…。詩人たちの未来が始まったのである。なかでも「蘇鉄」は、創刊メンバーの陣容といい、後世への影響力、貢献度、息の長さ等、群を抜いていた。七月二十日発行の創刊号は編集印刷人、川島豊敏、正木聖夫、発行人、島崎曙海（明治四十年、香美郡十佐山田町楠目生まれ）とあり、作品は、ダダイスト高橋新吉（愛媛県出身）の有名な詩、

留守といえ
ここには誰も居らぬと言へ
五億年経ったら帰ってくる

が巻頭詩となっていて驚かされる。島崎は、復員後の百姓生活に束の間の安らぎを見出したエッセー「くちなしの花」。川島（＜土佐文学さんぽ・20＞参照）は「復員記」。正木は「水洟の緯」を寄せている。定価は五円。ガリ版刷り、六頁立ての吹けば飛ぶようなペラペラ詩誌である。ところがこの小冊子が戦後高知の文化推進に大いに貢献し、幾多の詩人、論客を育てたのである。

昭和十年四月、島崎は安田小学校訓導を辞し、満州に渡り、南満鉄に入社した。一カ月遅れで渡満してきた詩人・川島豊敏とただちに「露西亜墓地」を発行し、詩活動を開始する。二年後、島崎は北支那派遣軍第四十七宣撫班長として従軍。島崎の実際の戦地活動は昭和十四年に刊行された詩集『地貌』（大連、二〇三高地詩社）の末尾に付された川島豊敏宛の手紙に詳しく記されており、「私ノ首ニ三千圓ノ懸賞金ガカカッテヰマス　一人歩キハ相當危険デス　私ノ戦死ガ早ヤ三度傳リマシタ」の文もある。

そして敗戦までの十年、宣撫活動に従事しながら、満洲詩人協会結成、詩誌「満洲詩人」刊行、詩集『十億一体』、共詩集『撃滅詩集』刊行と、満洲のバルザックの異名をとるほど獅子奮迅の活躍をするのである。詩集のタイトルでも推察できるように、いずれも戦争協力詩であった。

戦後、島崎は苦い思いを味わうことになる。昭和二十六年に発行された『日本現代詩大系』（第十巻・河出書房）の解説（中野重治）で、戦争という陥穽に転落した詩人の〝自己の持ち前を失った痛ましい例〟として、『地貌』に付された手紙文（前記）を全文引用されたのである。これは相当コタえたようで、さらに地元高知では、詩誌「鉄と砂」誌上で、作家土佐文雄に噛みつかれている。抗いがたい外圧の渦中にあり、知らずしらず身をそがれ翻弄された人間の過失的所業を、全景が見えはじめた後になって指弾することは、たやすいことだ。

戦後の島崎は「蘇鉄」と共に再出発を目指したように思われる。もともとエネルギッシュ、先駆け的資質を持った男。高知市職員組合長（初代）、市議選立候補、社会福祉協議会設立、文学学校運営委員等々、社会、文化方面で精力的に活動。そして詩は、徐々に人生派風のものに変質していった。それは島崎の急所の一点、戦争体験をいかなる方法で引き剥がし、かつ何をたぐり寄せなければならないかの対決の摩擦から生み出されたものであろう。掲詩は、戦前、戦後と二色に塗り分けられた詩人の深い悲しみが、じわりとにじみでている。

昭和三十八年、デング熱後遺症による心臓病で死去。五十六歳の若さであった。遺稿詩集に『熱帯』あり。

（国則三雄志）

見どころ＝●土佐山田町楠目誕生地近く山田堰
●野中神社（お婉堂）
●八王子の桜●鏡野公園

資料受贈報告（平成十五年六月～八月）

敬称略

▼**前田欣一**・「（句集）稲の花　前田欣一　土佐倶楽部」▼**杉本瑞井**・「釋迢空　折口信夫筆墨と文学碑拓本　杉本瑞井・長高登　椙本神社」▼**俳誌『壺』発行所**・「山歹の記　秋山風　俳誌『壺』発行所」▼**横田晴光**・「政治家無用論　橋本大二郎　講談社」他▼**片岡千歳**・「片岡幹雄作品集　片岡幹雄　タンポポ書店」▼**緒方侃**・「90才の記念史　緒方侃著刊」▼**荒木久雄**・「一絃の琴　宮尾登美子　講談社」他▼**長野為義**・「RED　CROSS暁の星　十川八重子　文芸社」▼**常石麗子**・「（句集）麗子Ⅱ　常石麗子　土佐倶楽部社」▼**別役禎子**・「（別役魚来遺句集）大我（月を遍く）　別役禎子編刊」▼**谷脇梅翠**　**大野祥雲**・「谷脇梅翠・大野祥雲二人展　谷脇梅翠・大野祥雲著刊」▼**梶田順子**・「白木蓮　梶田順子　ながらみ書房」▼**前田蔵**・「（詩集）青葉に光が満ちていた　前田蔵著刊」▼**土居俊彦**・「土居重俊旧蔵資料」…**土居重俊**（一九一〇～一九九八）は国語学者。明治四十三年香美郡岩村神通寺（土佐山田町）生まれ。昭和九（一九三四）年旧制高知高等学校卒業後、東京文理科大学国語国文学科に進み国語学を専攻。十二年同大学を卒業後、大分県立中津高等女学校や北海道庁立札幌一中で教鞭をとりのち帰高します。十六年から高知県立中村高等女学校、第二高等女学校、南海高等女学校などで教諭として勤務する傍ら県内各地の方言採集に取り組みます。二十二年高知師範学校教授、二十四年高知大学助教授、四十一年より同大学教授を勤め

◆◆◆ 文学館日誌 2003年6月～2003年8月 ◆◆◆

6月

◆1日　香川県仲多度津郡満濃町文化財保護協会67名ご観覧。◆3日　県人権研修30名ご来館。◆4日　文化厚生委員会視察9名。◆7日　かみしばい研究会10名。◆10日　県人権研修28名ご来館。◆11日　伊野町史談会21名ご来館。／愛媛民族学会会長森　正史氏ご来館。／坂の上雲まちづくりチーム副主幹森　正経氏ご来館。◆12日　生涯学習推進課長芝田政之氏他ご来館。「折口信夫短歌展」終了。期間中入館者811人。◆15日　日本文学原作映画上映会第5弾『私が棄てた女』(1969年・日活・116分、原作・遠藤周作)。第1回上映・午前10時～。午後12時～12時50分。解説「宗教文学としての遠藤作品」講師・鈴木健司氏(高知大学教授)。第2回上映・午後1時～。文学館ホールにて。参加者(午前130名。午後120名)。◆18日　高知付属中学校生徒40名。引率2名観覧。◆21日　第39回朗読の会第1部、朗読劇「芍薬」。朗読「象と耳鳴り」第2部、ドキュメンタリー「さよなら祐介」午後2時～4時。文学館ホールにて。参加者52名。◆22日　龍馬学園生徒29名。引率1名観覧。◆25日　高知付属中学校(1年生)40名。引率2名。(3年生)20名。引率1名観覧。◆28日　平成15年度専門講座「大町桂月　人と文学」(第3回目)講師・高橋正氏。午後1時30分～3時。文学館ホールにて。参加者60名。

7月

◆2日　高知付属中学校生徒40名。引率2名観覧。◆8日　春野町諸木婦人会24名観覧。◆12日　吉井勇記念館・開館記念講演会。文学館ホールにて。参加者140名。◆19日　第40回朗読の会　宮沢賢治の世界　第1部「おきな草」蜘蛛となめくぢと狸より「赤い手長の蜘蛛」「銀色のなめくぢ」「顔を洗わない狸」、第2部「林の底」よだかの星」。午後2時～4時。文学館ホールにて。参加者45名。／中村太郎先生ご来館。◆20日　ミニ企画展　中村太郎写真展「宮沢賢治　幻想紀行」開幕。／中村太郎先生夫妻ご来館。／オープニング記念トーク「宮沢賢治を旅して」講師・中村太郎氏(『宮沢賢治幻想紀行』写真家)。午後1時30分～2時30分。文学館ホールにて。参加者50名。◆23日　児童文学作家角野栄子氏ご来館。◆26日　平成15年度専門講座　「大町桂月　人と文学」(第4回目)講師・高橋　正氏。午後1時30分～3時。文学館ホールにて。受講生98名。◆27日　龍馬学園生徒31名。引率1名観覧。◆29日　夏休み社会体験学習31日まで。東高等学校総合学科1年生。◆30日　瀬戸内文学館連絡協議会(9館)午後1時から文学館ホールにて。◆31日　県人権研修12名ご来館。

7／20
「宮沢賢治　幻想紀行」
オープニングトーク

8月

◆1日　博物館実習。実習生15名。8月7日まで。◆2日　記念講演会「宮沢賢治と自然」講師・鈴木健司氏(高知大学教授)。午後2時～3時30分。文学館ホールにて。参加者70名。◆7日　県人権研修17名ご来館。◆9日　かみしばい研究会。参加者10名。◆10日　アニメ映画上映会「銀河鉄道の夜」(1985)午後1時30分～3時30分。文学館ホールにて。参加者91名。◆11日　17日まで開館時間延長午前8時30分～午後6時。◆19日　カルチャーサポーター連絡会。◆20日　第6回児童生徒文学作品朗読コンクール大方地区審査。午前10時30分～。大方あかつき館。参加者80名。◆21日　宮沢賢治のディナーwithミニオペラ。午後6時30分～9時。高知パレスホテル2F。参加費8、000円(当日演奏のCDプレゼント付)参加者80名。宮沢賢治作「手紙一」を、高知市在住の作曲家・武中淳彦氏の作曲により、ミニオペラ「竜のはなし」(上演時間約25分)として上演。あわせて、賢治ゆかりの食材を使ったディナーを楽しみました。●ミニオペラ「竜のはなし」出演　歌い語り…梅原ゆかり、ソプラノ　ヴィオラ・オブリカート(+パーカッション)…武中淳彦　ピアノ(+パーカッション)…大野日菜◆22日　第6回児童生徒文学作品朗読コンクール安芸地区審査。午前10時30分～。安芸女性の家。参加者70名。◆23日　平成15年度専門講座「大町桂月　人と文学」(第5回目)講師・高橋　正氏。午後1時30分～3時。文学館ホール。受講生80名。◆24日　第6回児童生徒文学作品朗読コンクール高知地区審査。午前9時～。文学館ホール。参加者200名。◆26日　宮沢賢治のディナーwithミニオペラ追加公演。午後6時30分～9時。高知パレスホテル2F。参加費8、000円(当日演奏のCDプレゼント付)参加者72名。◆30日　第41回朗読の会(風の会)第1部　吉屋　信子作「紅椿」「鬼火」、第2部　内田　百閒作「布哇の弗」「とおぼえ」。午後2時～4時。文学館ホールにて。参加者53名。◆31日　ミニ企画展　中村太郎写真展「宮沢賢治　幻想紀行」終了。期間中入館者数2064人。日本文学原作映画上映会第6弾『黒い潮』(1954年・日活・113分、原作・井上靖)。第1回上映・午前10時～。午後12時00分～12時50分。対談「『黒い潮』をめぐって」猪野　睦氏×堀見麻保郎氏。第2回上映・午後1時00分～。文学館ホールにて。参加者(午前68名。午後85名)。

8／2
「宮沢賢治と自然」

8／21、8／26　宮沢賢治のディナーwithミニオペラ

四十九年定年退官。あと四国女子大学にも勤めました。この間、方言学・国語音声学・国語学概論など専門の分野で後進の指導に携わる傍ら長年の研究の成果を『土佐言葉』(昭和三十三年)、『高知県ことば読本』(三十七年)、『ことばの散歩』(三十九年)、『高知県方言辞典』共著(六十年)、『土佐日記―付方言土佐日記全註釈』(平成元年)などの著書を刊行しました。平成三(一九九一)年には高知県文化賞を受賞。平成十年二月二十日没。八十七歳。

このたびご遺族から寄贈いただきました資料は国語学・言語学・方言学などの専門書を中心に千点を超える多数に上っています。当館ではこれらの専門書を核として特色のある「土居文庫」を作り長く活用させていただきたいと考えています。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

寄贈資料（一部）

高知県立文学館ニュース　第二十二号　平成十五年十月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八―八二二―〇二二、FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2003年

10～12月

10月――October	11月――November	12月――December

講座等

文学カレッジ

〔平成14年度文学カレッジ〕　いずれも13：30～15：00まで、文学館ホールで

多彩な講師陣により土佐に関わる文学にふれていただきます。

◇1回目・10／11(土)　「林芙美子と文学」(企画展にあわせて)　講師…別役　佳代（当館学芸課長）
◇2回目・11／22(土)　「大原富枝と宮尾登美子の女性像」　講師…山川　禎彦氏（作家）
◇3回目・12／13(土)　「田中貢太郎の文学」　講師…猪野　睦氏（詩人）
◇4回目・1／31(土)　「京極為兼の文学観」　講師…生田　勝彦氏（前高知女子大学教授）
◇5回目・2／14(土)　「詩人　島崎曙海の生涯」　講師…清水　峯雄氏（詩人）
◇6回目・3／13(土)　「寺田寅彦の回想作品」　講師…沢　英彦氏（詩人・文芸評論家）

催しもの

第6回　児童生徒文学作品朗読コンクール

◇県審査
＜日時＞11月16日(日)13：00～
＜場所＞文学館1階ホール
参加校61校、参加者127名の内地区審査で選出された22名の児童生徒の公開審査及び表彰式・記念講演会

◇記念講演会
講師：宮西達也先生(「にゃーご」「帰ってきたおとうさんはウルトラマン」などの絵本作家)

第43回高知県立文学館　朗読の会

＜発足4周年記念＞

日　時　平成15年10月25日（土）14：00～16：00
＜入場無料＞

－文学に親しむ秋　朗読で身近に－

・樋口一葉 作　「うつせみ」　朗読／長江貴世
・川端康成 作　「弓浦市」　朗読／野中久美子
・森　鷗外 作　「寒山拾得」　朗読／松田光代

企画展示室

生誕100年記念
「林　芙美子展　花のいのちはみじかくて…」

9／14(日)～10／19(日)

●名作「放浪記」「浮雲」で有名な昭和を代表する女性作家、林芙美子は、昭和15、16年に土佐・四国に来訪。昭和7年春のパリの恋、同13年頃からの戦争従軍資料らにスポットを当てるとともに、絵画や生前最後の着物などでその生涯を偲ぶ。

●**展示解説**（観覧券をお求め下さい。申込み不要）
10月11日(土)　午前11時より　解説：当館学芸担当
10月19日(日)　午後2時より　解説：当館学芸担当

「永遠のグリム童話展」

11／15(土)～12／21(日)

✪11月15日(土)14時～16時
「朗読の会～グリム童話を読む～」

✪11月28日(金)13時30分～15時
記念講演会「グリム童話の世界」
講師／小澤俊夫氏(ドイツ文学者)

＜申込み＞ハガキ(またはＦＡＸ)に住所、氏名、電話番号を記入のうえ文学館「グリム童話展講演係」まで。館受付でも申込み可。定員先着150名

✪11月30日(日)13時30分～15時30分
ミニコンサート「星の銀貨」とドイツの子どもの歌
音楽／武中淳彦氏(作曲家)アルフレッド・ゲアマン氏

✪期間中の毎週日曜日(11／30のぞく)15時～15時30分
よみきかせ　グリム童話

【休館日】10月――6，14，20，27日　11月――4，10，17，25日　12月――1，8，15，22，26～31日

次回企画展紹介　**良寛展　―詩と書とその生涯―**

2004年1月2日(金)～2月1日(日)

良寛の詩歌や書、書簡、良寛を慕った日本画家・安田靫彦らの絵画により良寛の軌跡を紹介いたします。

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日　毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料　一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内

●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●ＪＲ高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
●バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850